

死者の学園祭

赤川次郎

角川文庫



死者の学園祭

あかがわしろう
赤川次郎



角川文庫 5408

昭和五十八年四月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七二―一（大代表）

二一〇二 振替東京③一九五―〇八

印刷所——暁印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康千

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193 149710 0946(0)

死者の学園祭

赤川次郎



角川文庫 5408

目次

プロローグ

第一部 武蔵野学園

第二部 夏の日の冒険

第三部 死者の学園祭

解説

郷原 宏
二四二

一六九

二〇七

九

五

プロローグ

「真知子、ねえ、真知子。——ここよ、ここよ！」

声のする方を見上げた真知子は信じ難い光景に目を疑い、その場で立ちすくんでしまった。鉄筋校舎の四階のベランダから、クラスメイトの山崎由子が、校庭に立っている真知子へ手を振っている。しかし、何と由子は四階のベランダの手すりの上に立っているのだ。

手すりの幅は数センチしかない。そこを、山崎由子は気軽に散歩でもするように歩いているのである。

「何してるのよ！」

やっと我に返った真知子は叫んだ。

「歩いてるのよ」

上からは呑気な声^{のんき}が返って来た。

「危ないじゃないの！ 降りなさいよ！」

ベランダの下はコンクリートの通路なのだ。真知子は、誰かを呼ばなくては、と思った。

「大丈夫よ……」

「だめよ！ 落ちたらどうするの！ 降りて！ 降りるのよ、由子」

すでに放課後の校舎だ。近くに知らせる相手などいない。……

「馬鹿な事しないで！ 降りるのよ！」

「分かったわよ」

由子が手を振った。真知子は、ほっと息をついた。そして由子が、手すりから降りた。手すりの外側へ。

真知子は人が落ちる所など、見た事もなかった。映画などでは、人はゆっくりと落ちて来る。叫び声が長く余韻を引きながら、墜落して来る。しかし現実には、そんなものではなかった。

手すりの上から、山崎由子の姿が、不意にかき消すように消えた。同時に、ズン、という鈍い微かな音がして、真知子の数メートル前に、由子がうずくまるように横たわっていた。

何が起こったのか、納得するのにしばらくかかった。

「由子……」

真知子は両手で顔を覆って、駆け出した。用務員室だ。あそこなら誰かいるはずだ。真知子は走り続けた。……

五月の黄昏時^{たそがれ}であった。

結城^{ゆうき}真知子は十七歳。ここ、大阪の私立「M学園」の高校二年になったばかりだったが、それもこの日で最後だった。父、結城正造の仕事の都合で東京へ転居する事になったのである。父が貿易会社の部長で、転居、転校には馴^なれている真知子だったが、この日、もう一度ゆっくりと学校を見て来ようと思い立ち、暮れかけた、人気^{ひしけ}のない学園へやって来た。

町の中の学校なので、アスファルトのグラウンド、ままごとのような花壇、総てが、狭苦しい敷地に押し込められていた。真知子はくすんだ灰色の校舎の中をそぞろ歩いて、ホームルームでしばし感傷に浸り、それから赤い陽が斜めにさし入る校庭へぶらりと出た。鉄棒や、旗ざおの影がほとんど校庭一杯にのびて、不思議に懐かしい感じだった。ここにもそう長くいたわけではないが、十七歳という、何もかもが新しい日々を送ったせいかな、ここが母校だという気がする。

しばらく校庭をぶらぶら歩いて、鉄棒にぶら下がってみたりしてから、校舎の方へ戻りかけた。その時、あの声がしたのである。

「真知子、ねえ、真知子。——ここよ、ここよ！」

第一部 武蔵野学園

1 Tホテルにて

「パパはまだ来てないようね」

「早く着いたもの。座ってましょよ、ママ」

真知子と母の結城恵子は、手近なソファに体を沈めた。

「いやだ、このソファ」

真知子は笑って、「二度座ったら立てなくなっちゃいそう」

東京日比谷^{ひびや}のTホテル。重い回転扉を入った広いロビーである。金モールの制服のボーイがきびきびと動き回り、出入りする客も半分は外国人だ。

真知子は傍^{そば}を通り過ぎて行く外人たちの会話の断片に耳を傾けた。英語あり、フランス語あり、それ以外は何だか分からない。それでも分からないなりに、何となく自分が外交官にでもなつて、国際会議場にいるような気がする。

「何だかいやねえ」

母の恵子はクッションの中で腰をもじもじと動かしている。太っているので、一度どっしり身体^{からだ}を沈めたら、それこそ立つのが大変なのである。それに恵子はこういう場所があまり得意でない。東京の下町育ちなので、固苦しいのが苦手なのだ。

「ねえ、真知子、そのワンピースには、何かネックレスがあった方がいいね」
「そう？」

真知子は淡いブルーのワンピースを見おろした。

「そうよ。パパを待ってる間に何か見て来たら？ 行ってらっしゃい。私はここにいるから」

「いいのよ、ママ、気を遣ってくれなくても」

「何のこと？」

「分かってるわよ」

真知子は微笑^{ほほえ}んだ。大阪で、由子の自殺を目撃した事が真知子に大きなショックだったろう、とあれ以来何かと気を回してくれるのだ。

「もう大丈夫よ、私。心配しないで」

「だって、真知子……」

「本当よ。そりゃあ、あの時はショックだったわよ。でも、今はむしろ興味があるの」

「何て事言うの！」

恵子が目を丸くした。

「だって、そうじゃない。どう考えても、由子は自殺したとは思えないのよ」

「警察は自殺だって——」

「自分で飛び降りたのは確かよ。でも彼女、手すりの上を曲芸みたいに歩いてたわ。普段は

目立たない、おとなしい人だったし、自殺するにしてもあんな事をする理由が分からないの」

「死んだ人の気持ちとは分かりませんよ」

「謎ね。きっと警察は何かつかんでるんだと思うわ」

「警察の話はよしてちょうだい」

恵子が渋い顔で言った。「あんな不愉快な思いをしたのは初めてだわ」

「ママったら。警察はあれが仕事なんだから……」

「まるであんたを不良扱いしてさ、あの刑事、気に食わないいったら、ありゃしない」

真知子は由子の死の唯一の目撃者として、警察で事情聴取をされたのだが、そこへ恵子が怒鳴り込んで来たのである。

「一体どういうつもりなんです。家の娘をつかまえて！ あの子は感じやすい、デリケートな性質なんですよ。友達が目の前で死んだだけでもショックなのに、こんな薄汚いバイ菌だらけのゴミ捨て場に何時間も閉じ込めとくなんて、無神経にもほどがあります！ すぐ帰してもらいましょう！ それに狭い部屋に男と二人で入れておくなんて、危険です！ 刑事だろうが警視總監だろうが男じゃありませんか。何です、その顔は。そんな蛙のオバケみたいな顔を見たら、娘はひきつけを起こすかもしれませんよ！ さっさとあの子をここへ連れてらっしゃい！」

刑事と一緒に応接室にいた真知子は母の啖呵を聞いて、吹き出すのを必死にこらえていた。刑事の必死の説得で、恵子は自分が同席するのを条件に、真知子の事情聴取を承知したのだ

が、それからがまた大変だった。何しろ刑事が一つ質問する度に、「そんな訊き方がありませんか！」「文法が間違ってます！」「そんなどぎつい表現をしないで！」などと口を出すのである。まだ新米の刑事はハンカチで額の汗を拭いながら質問を進めなければならなかった。……正直な所、真知子は死んだ山崎由子とそれほど親しかったわけでもなく、めったに口もきかなかった。

一体、なぜ由子は死んだのか。自殺としても、あんな風に自殺する人間など聞いた事がない。真知子は警察の調査が終わらないうちに大阪を離れてしまったのが、残念だった。仲の良かったクラスメイトに、何か判^{わか}ったら手紙をちょうだい、と頼んで来たのだが、自分一人が目撃した謎の死を、自分で解決してみたいと秘^{ひそ}かに思っていたのだ。——真知子は大のミステリ・ファンであった。

「ほら、パパよ」と恵子が言った。

背の高い、粹な身なりの紳士がきびきびした足取りでロビーへ入って来た。

「パパ」

真知子が手を振ると、父、結城正造は、すぐに気づいてやって来た。

「やあ、待ったかい？」

「ついさっき来た所ですよ」

「パパ、お腹すいたわ」

「よし、じゃ上へ行こう」

「何を食べるの？」

「フランス料理がなかなか旨いよ」

三人はエレベーターへ向かった。

「フランス料理って、ナメクジを食べるんでしょう？」

母の恵子が気味悪そうに言った。

「いやね、ママ。エスカルゴはカタツムリよ」

「似たようなもんじゃないの。カツ丼はないんでしょうね」

「訊いてみてもいいが、多分無理だろうね」

「いいわ。仕方ありません」

エレベーターに乗り込むと、恵子は観念したように目を閉じた。

真知子は、いつも不思議で仕方ないのだ。こうも正反対の父と母が、どうして一緒になったんだろう。そしてまた、この二人、どうしてこうも、よく似合うんだろう。

正造は若い頃ドイツに留学した事もあり、今も商用で度々ヨーロッパを訪れる。髪に少し白いものが混じってはいるが、四十五歳の男盛り。いつも学校の友人たちから、「真知子のパパって素敵ねえ」と言われる。真知子にとっても、出張で家にいない日が多い点を除けば、本当に魅力的なパパなのだ。一方、母の恵子は下町気質丸出しの生活派で、経済的にもゆとりがあるのに、デパートの特売場漁りを一番の趣味にしている。もっともこれは大いに汗をかいて、少しでも細くなるという努力の一つでもあるのだが。

真知子は、万事に楽天的で呑気な、こんな母が大好きだった。

ところで真知子自身の紹介も忘れてはいけけない。何と言ったって、彼女こそこの物語のヒロインなのだから。

まず、ヒロインであるからには、絶世の美女——とは行かないまでも、やはり可愛い娘であるに越した事はない。その点、真知子は父親譲りの端正な顔立ちに、笑うとえくぼのおまけまで付いている。美しくてもツンとお澄まし、では困るが、気さくで人を打ち解けさせるのが特技である所は、下町型の母譲りである。

また、ヒロインの一般的イメージから言って、メートル八十センチのノッポでは少々難があるし、体重八十キロでは読者の想像力に余る事になりかねないが、真知子の体つきは中肉中背よりやや細目、細目といっても、バスト、ウエスト、ヒップは——いや、これはこの際関係ないので、公表は控えよう。まずは均整のとれた体、とだけ言っておく。

他にも、ヒロインの条件はいろいろあって、五十メートルも走ったら、息を切らしてへばってしまったり、何か怖い目に会う度に失神してしまうのでは、具合が悪いが、真知子は運動神経、度胸とも、決して同年齢の男子に劣るものではない。

——と、まあいい所だらけの真知子みたいだが、好奇心の人一倍旺盛な^{おうせい}こと、想像力が豊かで、先の先まで考えすぎてしまうのが、欠点といえはいえようか。

ともあれ、正反対の父と母の、上出来なカクテル——それが真知子である。そしてこの絶妙な味は誰しもを酔わさずにはおかない。……